

## 【B分科会 「発信する図書館、連携する図書館」】

助言者	横溝紀子（倉敷市教育委員会指導課 指導主幹）
司会者	中村由美（倉敷市立玉島東中学校司書） 浦川安代（倉敷市立緑丘小学校司書）
記録者	赤澤裕子（倉敷市立倉敷第一中学校司書） 清友雅子（倉敷市立北中学校司書）

### I 事例発表①

#### 司書側から発信する学校図書館活動

—学校図書館の機能と司書の専門性を考える—

倉敷市立柳井原小学校 司書 小野聖子

#### 1 はじめに

学校図書館に司書がいることで何ができるのか、専門職である司書がいる学校図書館からどういったことが発信できるのかについて研修をおこなってきた。

#### 2 班別研修のとりくみ

##### ① 学校図書館の機能と役割

公共図書館と学校図書館を比較することからその機能と役割を考えた。設置目的では、公共図書館が「一般公衆の利用に供し」（図書館法）とあるのに対し、学校図書館は「学校教育の展開に寄与」（学校図書館法）と記されている。この点から、学校図書館には学校教育を充実させ、児童一人ひとりの学びを豊かなものにしていくことが求められていると考える。

##### ② なぜ学校図書館に司書が必要なのか

学校教育を豊かなものにしていくには、学校図書館には司書が必要であると考え、「本がなければ図書館とはいえないが、本と人を結びつけてくれる人がいなければ、図書館は単なる書庫か学習室でしかない。子どもたちに豊かな読書、学ぶ喜びを保障し、教師の学習指導を援助

するためには、学校図書館には専任、専門の職員『司書』が必要である」と成文化した。

##### ③ 学校図書館司書の専門性とはなにか

選書・配架・点検などの基本的な業務をおこなったうえで、司書に求められる専門性とはなにかを考え、司書の日常業務（授業支援・図書の時間・図書委員会など）をあげてみた。これらはすべて本（資料）と利用者（児童・生徒・教職員）を結びつけるためにおこない、その結果、学校教育が豊かなものになっていくと考えた。つまり司書には「利用者を知り、資料を知り、両方を結びつける」ための専門的知識や技術が必要であると考えた。利用者を知るためには、潜在的な要求を把握すること、一人ひとりの子どもを知ること、学習状況を知ることが求められる。資料を知るには、新しいメディアやさまざまな資料に精通していることが必要である。両者を結びつける技術・方法を身につけていること、司書教諭や図書館担当教諭と協力し、それぞれの専門性を生かし校内に図書館の意義や役割を浸透させることも求められている。

##### ④ 司書側から発信する具体的な活動・実践

司書の専門性とはなにかを踏まえ、班員が各校で活動・実践にとりくんだ。ブックリストの作成やブックト

ークでの授業支援、地域を巻きこんだ図書館活動の提案など、さまざまなことがおこなわれた。この中から中学校の実践を報告したい。この学校では、「図書館からの情報発信」をテーマに、図書館にある本を見える形で紹介し、読書の楽しさ、喜びを知るチャンスにつなげることを目的に実践にとりくんだ。

まず、生徒がおすすめ本を紹介する「教えて！教えて！おもしろかった本、感動した本」の募集、生徒・教職員の「おすすめ本100」の冊子作り、図書館内に設置した人気作家の紹介コーナーや、読書マラソンなどをおこなった。また、図書館が憩いの場となるように、月ごとの館内掲示や別置を工夫し、館内のいたるところに本の紹介コーナーを設置した。図書館だより、新刊紹介も頻繁に発行し、つねに生徒たちの関心を図書館にむけるとりくみをおこなっている。

こうした実践の結果、図書館の来館者が大幅に増加し、本を手取る生徒も多くなった。

#### ⑤ 司書が考える図書館運営計画・活動報告

司書が活動・実践をおこなう上で司書教諭や他の教諭の協力、校内での図書館活動に対する共通理解が不可欠である。図書館に対する司書の思いや図書館の機能と役割を伝えるためにも「運営計画」を作成し、1年間のとりくみを「活動報告」として総括をおこなうことが必要であると考えた。

運営計画とは、学校図書館を運営していくための指針であり、学校図書館の意義を全職員が共通理解し、図書館の組織・機能を働かせるためにも作成し、司書も運営計画に基づいて図書館活動をおこなうものと考えた。

必要な項目としては、「学校図書館とは」「学校教育目標」「重点目標」「活動方針」「資料収集方針」「年間活動計画」などが挙げられる。

次に活動報告とは、1年間の活動や実践・利用状況などを明らかにし、全職員に報告するもので、全職員が学校図書館を理解し関心を持つきっかけにすること、司書も活動をまとめることで反省や課題が見つかり、次年度の運営計画へとつながるものと考えた。必要な項目としては、「学級数」「児童生徒数」「購入決算額」「受入状況」「貸出状況」「予約状況」「図書館利用状況」「広報活動」「図書館行事」「別置・展示」「総括」など活動がデータとしてわかるもの、次年度の反省として使える項目が必要と考えた。

今回の研修で職員すべての学校で「運営計画・活動報告」を作成し、職員会議などで提案・報告をおこなった。

### 3 まとめ

この研修を通して、司書側から発信する学校図書館活動が多岐にわたり、多様で幅広いことを感じた。各校の実践を交流することで、自校に取り入れたいこと、工夫している点など参考になった。司書側から発信した活動・実践をおこなうには、司書側に専門的な知識や力量が備わっていることが必要であり、個々の専門性をどう向上させていくかが今後の課題である。

「運営計画・活動報告」を作成したことで1年間の活動を具体的にイメージでき、系統立てた活動をおこなうことができた。また、図書館としての目標を示すことで反省・課題もわかりやすくなり、教職員の図書館に対する理解や利用につながっていった。

1年間の活動を報告できること、知りえた情報を生かして運営計画を提案できることは、司書だからこそできることだと考える。

今後は、こうしたとりくみが、市内すべての小中学校図書館で実践されることが求められている。自己の業務を振り返り、改善することで利用者である児童・生徒・教職員と資料を結びつけること、いっそう図書館の働きを発揮させることができるのではないかと思う。

今後も学校図書館司書だからこそできるとりくみを追求し、発信していきたいと思う。

## II 質疑応答①

小学校司書

Q 司書側から発信する様々なとりくみに、司書の専門性を再確認する内容だった。読書マラソンについて具体的に聞きたい。また、笠岡市では年度末に各校の活動報告をまとめ、市教委に提出しているが、倉敷市では市への報告はどうしているのか。統一した形式の報告書はつくっているのか教えていただきたい。

A 読書マラソンは、朝読書でとりくんだ。本を読んだ後で、簡単な感想を書く形にした。1冊読むごとに1枚書いて、マラソンのように増えていくことを予定していたが、朝読書期間だけでは何冊も読むことは難しかった。市への報告は、司書部会研修会のたびに各班の研修内容の報告はおこなっている。各校の活動報告は、まだできていないのが現状である。今後は活動報告の提出に向けて形式の検討などをおこなっていかなければならないと考えている。

## I 事例発表②

### 司書教諭との連携をさぐる

倉敷市連島北小学校 司書 梶谷 忍

#### 1 はじめに

学校生活の中で学校図書館をもっと利用してほしい、図書館活動を学校全体に広げたいとの思いから、司書教諭とどのように連携していけばよいかを実践を通して考えるとりくみをおこなった。

研修のながれとしては、図書館活動を「利用指導」「調べる学習」「図書館活動・委員会及び行事」の3つに分け、それぞれの内容に沿った年間計画、指導計画を司書教諭とともに立て、実践をおこないまとめた。

#### 2 実践報告

「利用指導」では、段階的な指導計画を司書教諭と立てた。内容を5つの項目に分け、それぞれがステップ1～3の段階で系統的に身につくように考えた。

実践においては、話し合いの過程で役割分担を意識したので、司書教諭、授業者、司書の3者が共通理解をもって授業に関わることができ、スムーズな連携がおこなえた。

児童が学校図書館を有効に利用し、資料・情報を活用できる力を育成するためには、児童の発達段階に応じて系統立てた計画を立て、段階的に進めていくことが大切であると実感した。そのためには全校の共通理解のもと指導がおこなわれる必要があり、そのためになにができるかを探っていくことが今後の課題である。

「調べる学習」では、準備段階で司書教諭が加わり、授業者、司書とともに話し合って授業作りに関わる実践をおこなった。たとえば3年生の「国語辞典を使おう」では、3者が授業内容について細かく話し合ったことで、学年全体で授業の進め方が統一された。また2年生の「サンゴの海のいきものたち」では、司書教諭と司書が授業の流れについて相談した後、各授業者との打ち合わせをおこなうというやり方をとった。司書教諭が全クラスの時間割を調整

し、司書はブックトーク案を練り、資料の準備をおこなった。

研修していく中で、司書教諭、授業者との役割分担ができ、資料の準備や話し合いのときに司書がどのようなポイントを抑えていけばよいかはわかってきた。また、年間計画に沿った資料提供や司書が加わった授業の実践を重ねていくことで、児童生徒の学習の深まり、広がりなどが実感できた。

このような司書教諭あるいは部会担当教諭との連携のとれた実践が、学校全体のものにしていくことがこれからの課題である。

「図書館活動・委員会および行事」では、司書教諭と司書と一緒に年間計画やそれに基づいた行事の計画を立てて実践をおこなった。

たとえば、中学校の「朝読書活動」では、3年間にわたり、司書教諭と司書が協力して朝読書活動へのとりくみを進め、全校一斉読書が通年でおこなわれるようになった。「夏休みの開館行事」では司書教諭だけでなく他の教諭の協力も求め、行事の一つ一つが充実し、児童にも大変好評だった。「校内読書週間」では、司書教諭と児童にいろいろな本を読ませるための手だてを話し合い、めあてを設けてとりくんだことにより、普段図書館に足が向かない児童にも興味を持たせることができた。

司書教諭が広報的、窓口的な役割を、司書が資料提供や環境整備などの役割を意識して担うことにより、よりスムーズに図書館活動がおこなえた。今後はさらに学校全体のとりくみとして認識される方向に力を入れていきたい。

#### 3 まとめと反省

司書教諭と相談して年間計画や利用指導計画を立てたことで、お互いに学校図書館活動の流れの把握や、役割分担ができた。そしてこの計画書を全職員に配付したことで学校図書館を意識付ける機会を得た。続いて、それらの計画に沿って実践を積み重ねる中で、短時間でも話し合うことにより、お互い

の役割を意識することができ、実践による児童生徒の学習や活動の充実が実感できた。しかし、授業軽減のない司書教諭と連携し協働するには、司書側から働きかけていかないと難しい面があることも実感した。せつかくの実践も学校全体に「学校図書館教育」が位置づけられていないと、とりくみに継続性や広がりを持たせられないと感じた。今後は校内研修などの機会を通じて積極的に校内に学校図書館利用を働きかけ、理解や協力を得られるよう努力を重ねていきたい。

## II 質疑応答②

中学校司書

Q 中学校では図書館に足を運ぶ生徒、教諭は限られている。図書館教育への理解を得られるようなことをしたのか。

A 小さなことから少しずつ積み上げていった。朝読書のとりくみでも、最初は読書週間から始め、1ヶ月、2ヶ月、1年というふうに延ばしていった。司書教諭が折に触れ図書館の現状を伝える機会をつくり、全体への声掛けをしていくことで理解されていった。

中学校司書

Q 岡山市では仕事を限定したり、分担に縛られる恐れがあると考え“分担表”は作っていない。兼務である司書教諭との連携は難しいと感じているが、図書館担当教諭と司書教諭をそれぞれどう捉えて研修したのか。

A 表は自分たちで実践を整理し、見直すために作った。今もまだ日々模索中であり、これを足がかりに、今後も司書教諭との連携の形や、司書教諭の専門性をどう考えるかについて探っていきたいと考えている。

## III 助言

「司書側から発信する学校図書館活動」の発表について。学校図書館に司書がいることでなができるのか、専門職である司書がいる学校図書館からどういったことが発信できるのかをテーマにした発表だった。司書がいることで、学校教育を充実させ、児童生徒一人ひとりの学びが豊かになり、本と人を結び付けることができる。子どもたちには豊かな読書、学ぶ喜びを保障し、教師には学習指導の援助をおこなうためには、学校図書館には専任・専門の司書が必要であるという説得力のある発表だった。機

能的で整備された図書館であることを踏まえたい。えで、司書教諭、図書主任、担任と連携して図書館だよりの作成、授業支援、図書の時間、図書委員会、図書館行事、地域とのかかわりなどをおこない、こうした実践の積み重ねの結果、本と利用者をつなげ、学校教育が豊かなものになっていくのではないかと感じた。利用者を知り、資料を知り、両者を結びつけることに司書の専門性があると思う。子どもたちを取り巻く現状や潜在的な要求、一人ひとりの子どもや学習状況を知るためには、司書が子どもたちをよく観察し、表情、行動、つぶやきなどから子どもたちのニーズを知ること、また担任、司書教諭、他の教諭との連携によりニーズを知ることが大切ではないか。その上で、専門的な司書が新しいメディアや資料に精通していること、ブックセンスを磨くことで技術を深めていくことが子どもたちの豊かな学びにつながっていくのだと感じた。そのために具体的に図書館運営計画、活動報告を作ったことは意義あることだと思う。運営計画を作り全職員に知らせることは、図書館の意義を再確認し、自分たちの課題として捉えることができるのではないか。活動報告で自校図書館の1年間の活動の様子や実践、利用状況を明らかにすることは、教師の知りたいことであり、子どもたちの教育活動に広がっていくものであると思う。どういう本が読まれているのか、どれくらい読まれているのか、どういったことが課題であるのかを自分たち一人ひとりの問題として認識し、次につながるものにする、つながりを持たせることが大切であると感じた。

「司書教諭との連携をさぐる」の発表について。授業や図書館行事などで学校図書館をもっと利用してほしい、図書館活動を学校全体に広げたいというのは全職員の願いである。本のプロとしての司書と本についてだけでなく学習内容、教育課程、児童生徒の発達段階に精通している司書教諭と一緒に年間計画を立てるということはあたりまえのようだが難しい。このような一つ一つのことをしっかりおこなっているということが重要である。司書教諭にとっては図書館活動を学校全体に広げていくうえで、司書と相談、連携をしながら得る、ちょっとした情報というのは大切なものである。一つ一つの実践を積み上げていくなかで、連携の方法を探るのは良いことだ。それぞれの学校にはそれぞれの実態・実情があり、児童生徒の様子も違うので、できるところから探るとよい。その中で司書教諭と授業者の分担が明確になっていく。

そして年間計画をもとに授業を積み重ねていく、いきあたりばったりではなくて、年間計画をもとに授

業をするということが重要だ。それと同時に、たとえば国語では、“楽しんで読書ができているか”“読書力が高まっているか”“活用する能力がついているか”“自分なりの考えを持ったり次の学習へとつながることができるか”“学習内容が広がり深まっているか”というようなことを振り返り反省する必要もある。各教科や特別活動、特に総合的な学習の調べ学習などでは、ただ与えられるだけでなく、児童生徒が探究することが大きな目標になっているので、色々な資料の中から自分のめあてに沿ったものを選び、自分なりの思いや計画に沿ってまとめることができたかどうか、そのあたりまでを学習内容のプロである司書教諭と連携しながら反省をしていくことが大切なのではないか。図書館活動においては司書教諭が職員や保護者に提案をするという広報的、窓口的な役割を、司書は資料提供・館内整備という専門性をいかした役割を学校の実態に応じて探っていくということも意義があったと思う。

“連携”は難しいが、今できることは、年間計画を立て、学校教育の中に学校図書館教育を位置づけること、そしてそれを全職員で共通理解すること。校内に向け司書教諭とともに細かな情報を積み上げること。そして教育課程を考えると、校内研修をするとき、図書館部会など少しずつの時間でもこの熱い思いを学校に広げれば、その思いが先生を動かし、そして子どもたちの豊かな学びにつながっていくと思う。そういう場をとらえて発信をするというのは大変だと思うが、少しずつでもこのようなとりくみを広げていけば学校全体のとりくみになっていくのではないかと強く感じた。